

1974 年に製作された映画『Animals Are Beautiful People』は、日本では『ビューティフル・ピープル／ゆかいな仲間』の題で 1975 年に公開された、南部アフリカの野生動物を描く異色の自然ドキュメンタリーです。監督は、のちに『ミラクル・ワールド／ブッシュマン』を手がけるジェイミー・ユイス。ナミブ砂漠からオカバンゴ川・デルタ、カラハリ砂漠へと舞台を移しながら、厳しい自然に適応して生きる大小さまざまな動物たちの一年を追っています。単なる生態記録ではなく、巧みな編集と音楽、ユーモラスな語りによって、動物たちをまるで一人一人の「登場人物」のように描いたところに、この映画ならではの魅力があります。1974 年にはゴールデングローブ賞のドキュメンタリー映画賞も受賞しました。

日本語版の語りを担当したのは渥美清さんです。その温かく、とぼけた味わいのある語り口も映像によく似合っていました。作品を貫いているのは、「動物は決してふざけて生きているわけではない。しかし、その動作や仕草は驚くほど人間に似ている」という視点です。食べ物をめぐって争ったり、子を守ったり、恋の相手を追いかけたり、失敗して慌てたり——動物たちはすべて大真面目なのですが、人間の目には思わず笑ってしまうほど人間臭く映ります。原題の「Animals Are Beautiful People＝動物たちは美しい人々」も、そんな作品の精神をよく表しています。日本語版で渥美清がナレーションを担当したことについても、当時の視聴者の記録が残っています。

この写真のシジュウカラも、もちろん本人は大真面目です。切り株の先で首を深々と折り、じっと足元を見つめる一瞬を切り取ると、何かとんでもない失敗をして、「どうしてあんなことをしてしまったのだろう……」と反省している人間そのものに見えてきます。餌を探しているのか、羽づくろいの途中なのか、本当の理由はシジュウカラのみぞ知るところですが、映画の言葉を思い出しながら眺めると、ますます可笑しくなります。題して「樹上で猛省中のシジュウカラ」——動物はふざけていないのに、その仕草は驚くほど人間に似ています。

(2026 年 8 月下旬／北軽井沢)

